

回覧

加納天満宮の夏まつり

みそぎまつり 六月三十日 宵まつり

六月は一年上半期の終わりの月です。その最後の日である六月三十日に、上半期の間に知らず知らずのうちに犯した罪穢れを祓い清めて生まれかわり、無病息災を祈る行事が「みそぎまつり」(禊大祓)です。夏越の祓(大祓)とも言われ、清らかな心身に立ち返って夏を乗り越え、残り半年を元気に過ごしたいと、多くの方が参拝に訪れます。一年の下半期については、十二月三十一日に大祓神事(年越しの祓)が行われます。けがれとは「気枯れ」の意で、心の沈滞した状態、活力のない心から生じます。不平不満、ねたみ、悲しみ、怒りの心、これらを気枯れた心と言い人間を不幸にします。健康を害したり、人間関係もうまくいかなくなる。不正や暴力がはびこり社会全体が悪くなる。この諸悪の根源であるけがれを祓い清めて再生しようとするのがみそぎの心です。これは社会全体を視野においた信仰行事と言えます。

天満宮から予め町内に形代(人形)が配付されます。形代には氏名・年齢などを記し、これで体をさすり息を吹きかけます。形代は、右手で持って左肩から右脇腹へさすり、次に左手に持ち替えて、右肩から左脇腹へさすり、再び右手に持って左肩から右脇腹へさする。最後に両手で形代を持って、これに息を吹きかける。こ

うすることによって、この半年間に積もった罪穢れを形代に引き取ってもらう。まことにありがたい話です。この形代に浄賽(おさいせん)を添えて、形代奉納箱に納めます。

境内(拝殿)に設けられた茅の輪をくぐり、撒かれる切麻で身を清め、神主の振る大麻でお祓いを受け、形代を拝殿に設置された奉納箱に納め、最後にお供えのお米をいただきます。このお米を混ぜて炊いたご飯を食べると、夏病みしないと言われています。

ちようちんまつり 七月十四日 宵まつり

「ちようちんまつり」(提灯祭)は加納天満宮の境内社、津島神社の例祭(七月十五日)の宵祭り(前夜祭)です。津島神社には、知恵と勇気で八俣の大蛇を退治したと言われるスサノオノミコトがお祀りされています。

大きなささ竹の枝に赤丸提灯をつるし、あたりが暗くなる頃、提灯に灯りをともし、それを担いで町内ごとに天満宮境内の津島神社を目指し、無病息災を祈ります。献灯する提灯は赤丸提灯。これは八俣の大蛇の赤い目を象徴します。八つの長い首と頭、赤い目が二つずつ。合わせて十六個の目が、ささ竹とともにユラユラ動きながら一斉に境内に繰り込んで来る様は実に壮観です。このまつりが終わると夏の開演です。大蛇を退治したご祭神のご神徳をいただいて、夏を元気にお過ごしください。